

昭和 S P レコードで辿れば

柳家金語樓と戦前の大衆娯楽

S P レコード収集家■城内 實

隊」というタイトルに変え再吹き込みをしている。

(三)

戦前という時代を知る上で当

時の流行歌や政治家の演説レコードは大変参考になるといふことをこの連載で指摘してきた。

実はその他にも戦前の世相をこの現代に蘇らせるものとして当時の大衆娯楽がある。

中でも柳家金語樓の新作落語は戦前に日本の雰囲気を追体験する上で貴重な存在である。今回は柳家金語樓を中心とする戦前に活躍した喜劇人について取り上げることとしたい。

(一)

柳家金語樓と言えば戦後は映画界やテレビの「ジェスチャー」、「おトラさん」で活躍した喜劇役者としてのイメージが強

いが、もともとは三遊亭金登喜の名で六歳で初高座に上がり、大正十五年四月にはヒコキ印のレーベルから「嘶家の兵隊」を出して一世を風靡した天才落語家であった。

「嘶家の兵隊」では陸軍二等卒山下敬太郎（柳家金語樓の本名）が官姓名を名乗るところが大いに受けた。

「官姓名を名乗れ」
「ハ―誰のでありますか」
「人のを名乗ってどうする、お前のだ」
「忘れました」
「官姓名を忘れる奴があるか、教えてやるやってみたい、陸軍歩兵二等卒、山下敬太郎」
「ハア、ようがす、陸々」
「陸々ではない陸軍」
「陸軍砲兵」

「歩兵だ」
「歩兵一等卒」
「二等卒ではないか、もとい」
「陸軍歩兵二等卒山下ケツタロー」
「何故明瞭に敬太郎と言えん、もとい」
「はっ 陸軍歩兵二等卒山下ケツタロー」
「元気がない、もとい」
「陸軍歩兵二等卒山下ケツタロー」
「もっと力をいれてやらんか」
「とほほ、もとい、海軍」
「海軍ではない陸軍だ」
この「嘶家の兵隊」に対して憲兵隊から神聖な陸軍をちやかすのはなにごとかというクレームがついたそうであるが、その後金語樓は日本コロムビアの専属となった際に「落語家の兵

柳家金語樓はこの兵隊落語以外にも積極的に流行を取り入れて新作落語を量産した。当時の落語家の中ではレコードの吹き込み回数において群を抜いている。

筆者は別に柳家金語樓の盤を積極的に集めているわけではないが、手元には「世界漫遊」、「浅草見物」、「野球見物」、「円タクの悲哀」、「小唄レビュー」、「新婚旅行」、「続慰問袋」を含め二十数枚のレコードがあるが、これも全吹き込みのごく一部にすぎない。

「世界漫遊」は金語樓が日本を離れて朝鮮、上海、インド、スエズ、ベニス、マルセイユ、ベルリン、ロンドン、米国本土、ハワイを見物して日本に戻り、気がついたら夢だったという滑稽な内容である。「円タクの悲哀」にしても古典落語の「うどんや」のいわば現代版で、酔っ

「世界漫遊」は金語樓が日本を離れて朝鮮、上海、インド、スエズ、ベニス、マルセイユ、ベルリン、ロンドン、米国本土、ハワイを見物して日本に戻り、気がついたら夢だったという滑稽な内容である。「円タクの悲哀」にしても古典落語の「うどんや」のいわば現代版で、酔っ

ばらいやなんかからまれて商売があがったりという設定である。

金語樓は新作落語のみならず古典落語の方でもなかなか良い味を出している。なんせ売れっ子になってからも四代目古今亭志ん生のところに通って修行を積んでいたのであるから。

(四)

金語樓の「嘶家の兵隊」に次いで一世を風靡したのは横山エントツ、花菱アチャコの「早慶戦」である。

この「早慶戦」は、昭和八年の秋季リーグ、あの伝説的な水原のリング事件があった試合にたまたま横山、花菱のコンビが観戦したことで出来上がった作品である。

ちなみに昭和五年にはこのコンビの結成を契機に古くさい「萬歳」から「漫才」という表現に改められたし、和服からモダンな洋装に変えられた。

当時はまだ日本プロ野球界の黎明期であり、プロ野球よりも

六大学野球（早慶明法立帝）の方が、当時相当普及していたラジオの実況放送を通じて、人気を集めていた。

この伝説的な「早慶戦」でのやりとりの一部を紹介する。

「あの然し応援団はどうです」「早稲田の応援団はふるってるなあ」「ええ」「ええ上着を脱ぐとみな白いシャツで文字になって現れるなあ」「はあ」「打て守れ」「入営を祝す」「そんな阿呆なことあるかいな、君ほんまに見に行っとったんか」「はあ初めから終いまでゆっくり見てきました」「そんなら君慶應のバッテリーは誰や」「ああこれはどうも有難うございます」「どうも有難うやありませんがな、慶應のバッテリーは誰でした」「どうぞ君から先ずお先へ」「頼りないこと言うてるなあ、慶應のバッテリーはねえ初め三宅」「夕焼け小焼けで日が暮れて」……

(五)

大東亜戦争が勃発するや大衆

娯楽は相当完全に規制されたと考えられている。そういった傾向はもちろんあったが、そうした見方は必ずしも当時の状況を正確に反映していない。

その証拠に東條英機首相ですら開戦直後の昭和十六年十二月十八日付けの中外商業新報に次のように語っている。

「銃後の心を楽しませる健全娯楽が必要だ。映畫を観ることも大變結構だし、芝居、落語も是非國民のために必要だ。そういふ考へから、私は國民に大いに楽しんで頂ける娯樂をもっともっと廣く行きわたるやうに、部下に命じて研究させてゐる。」

実際に昭和十九年五月には六



枚組の「前線に送る夕」というレコードが発売され、これは流行歌あり、都々逸や小唄あり、落語や漫才声帯模写ありといった大衆娯樂のオンパレードであった。

(六)

柳家金語樓やエントツ・アチャコにしても芸人としてのこだわりやプライドがあり一種独特な芸風があった。

喜劇人でありながら明治時代に生まれた日本男児としての誇りや気概があった。芸風にも当時の世相が反映されていてなかなか興味深い。

(続く)